



CTL Kansai University Center for Teaching and Learning Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

March 2012

vol. 08



教育とITの共存は世の常

教育開発支援センター
副センター長 山本敏幸

以前、TLC (The Learning Channel) でトマス・エジソンの映写機（映写機機）の発明の歴史を取り扱っている番組を見たことがある。その中で、発明した映写機を普及させるために、エジソン自身がプロモーションフィルムを作成していたことを取り上げていた。今のハリウッド映画文化を夢見ていたエジソンが、映写機を使って数々のプロモーションフィルムを作成したことがわかった。そのようなプロモーションフィルムの中で目を引いたのは、映写機のテクノロジーはかつて黒板が今日の教育に導入された時以上に教育のダイナミックスを変革するという主旨のプロモーションフィルムであった。エジソンも最先端のITである映写機が当然のように教室で利用されることを描いていたようだ。

今でこそほとんどの教室はスマートクラスルームとなり、ビデオやDVD、パソコンの画面をプロジェクタを使いたく受講生に見せ、教員が伝えたい情報や知識をドラマチックに見せることができる。映写機の発明以来、今日のスマートクラスルームの普及まで119年の歳月を要している。

さて、汎用型のパソコンが発明されて教育現場で使われるようになるようになるまでに何年の歳月が経ったであろうか。電算機が出現したのが1940年頃で、日本でもそろばんの達人と大型電算機とどちらが速く計算が出来るかを競うようなテレビ番組をご記憶の方もおありであろう。

汎用型のパソコンが発明されたのは1977年頃で、まだエジソンが映写機を発明してからスマートクラスルーム化になるまでの時間に比べると3分の1の時間である。

近年、教育工学が進歩し、教育現場でのICT活用が求められるようになると、どのように学習をさせれば効果的に学習を促進できるかがだんだん理解されるようになってきた。手を使いインテラ

クションが豊富なアクティブラーニングをhands-on、heads-onでドラマチックにかつダイナミックにコミュニケーション取る教育が有効であることがエドガー・デールなどの研究成果から見えてきた。

本学のように多人数講義形式の授業形態が多い大学では、1人の担当教員が限られた授業時間内に個々人の受講生とコミュニケーション取ることができる機会が非常に限られている。このような直接面接型での学習環境が限られている状況では、パソコンなどのICTを活用してインターネット上にバーチャルな世界に学習空間を延長し、アクティブラーニングを実践する場になりうるのではないだろうか。

また、今後は、インフルエンザの流行や流行性のウイルスなどのため、あるいは、台風や地震等の自然災害のために長期の学級閉鎖や学校閉鎖を余儀なくされるような状況を想定しなければならない。最悪、大学が半年や1年授業を行えなくなることも想定しなければならない。このようなリスクは今の教育の現場には常につきまとるものである。こういった状況では、いち早く元の状態に復帰できるレジリエンシー（回復力）を備えた体制が、企業のみならず、教育機関でも必要となってくる。つまり、そのような状況下でも、滞りなく学習ができ、いち早く元の状態に復旧できるような大学が必要となってくるのではないだろうか。そのような状況下でも本学が他大学の見本となるロールモデルとして先駆的な役割が果たせばすばらしいことであるし、授業が滞っているような他大学への貢献もできるし、限られた4年間の時間で子供から大人に育っていく大学生への教育が継続できることになる。

このような役割を果たすにはICTとの共存が、エジソンが夢描いたように、不可欠である。CTLはその最先端のICTと教育の共存関係を担う役割を果たさなければならないのではないだろうか。